

書評 Howard M. Federspiel, Islam and Ideology in the Emerging Indonesian State: The Persatuan Islam (PERSIS), 1923 to 1957

著者	山本 信人
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	44
号	12
ページ	65-69
発行年	2003-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007737

Howard M. Federspiel,

*Islam and Ideology in the
Emerging Indonesian State:
The Persatuan Islam (PER-
SIS) 1923 to 1957.*

Leiden, Boston, Koln: Brill, 2001, xii + 365pp.

やま も と の が と
山 本 信 人

1923年、インドネシア（当時はオランダ領東インド、以下インドネシアと表記）の西ジャワ・バンドゥンで、PERSIS（Persatuan Islam：イスラーム統一）という近代主義イスラーム集団が誕生した。本書は、1930年代と50年代における PERSIS に関する研究である。本書は2001年に刊行されているが、もとを糺せば1966年に英国マクギル大学に提出された博士論文を基礎にし、70年に米国コーネル大学東南アジア・プログラムから刊行されたものに加筆修正を行っているために、いわば30年ぶりの復刻版であるといつてよい。

本書の構成は以下のようになっている。

第 部 序

第 部 後期植民地インドネシアにおける PER-
SIS (1923~42年)

第 1 章 オランダ、インドネシア、ムスリム社
会における文脈

第 2 章 PERSIS の結成 組織と行動

第 3 章 PERSIS の根本的信念

第 部 議会制民主主義期における PERSIS (1948
~57年)

第 4 章 議会制民主主義期の文脈

第 5 章 議会制民主主義期における PERSIS の
行動

第 6 章 独立インドネシア社会における PER-
SIS の信念とその適用

第 部 結語

以上の構成からもわかるように、本書の研究対象は PERSIS の思想と政治的活動であるが、政治環境的には、日本軍政期から社会革命期（1942～48年）を除く、オランダ植民地末期にあたる30年代および独立インドネシア初期で政治的な活性期にあった50年代が対象時期となっている。第 部の導入では20世紀にいたるまでのインドネシアにおけるイスラームの浸透と定着について基本事項を整理している。そこでは歴史的に当該地域で森羅万象を信仰の対象とする民間宗教が「前」イスラーム期の特徴であるとされている。第 部では、インドネシアとの比較の対象にエジプトとパキスタンの近代主義的イスラーム団体があげられ、その延長として末尾で1980年代から90年代にかけてのインドネシア人イスラーム思想家についても言及がなされている。第 部と第 部は今回大幅な加筆が行われた部分であるが、第 部のイスラームの歴史についてはもっと簡潔にまとめることができるし、第 部は近代主義イスラームについてあまり妥当性のない比較がなされている。しかし、本書の中心的議論は、第 部の1923年から42年というオランダ植民地統治末期、第 部の48年から57年のいわゆる議会制民主主義期における PERSIS の思想と政治的行動であるので、それについては議論の紹介をしたい。

本書の特徴は、イスラーム近代主義といわれる PERSIS の思想的基礎を整理した点にある。著者が指摘しているように、PERSIS は政治社会活動を中心とした組織というよりは、数名の優れたイスラーム指導者たちが緩やかに交流の場をもったサークルであり、インドネシアにおける政治的発展の中心を構成するというよりむしろ傍流に位置していた。政治思想的な重要性は必ずしも高くはないとしても、PERSIS はインドネシア社会における「正しい」イスラ

ーム,あるいはイスラームのあるべき姿を定義した。そこにこそインドネシア政治社会思想的な文脈における PERSIS の意義があるという (pp.viii ix)。「正しい」イスラームとは,初期イスラームの時代に先達によって構築されたムスリム共同体,すなわちシャリーアによって統治されるムスリム社会のあり方をさしている。

社会浄化のために,イスラーム的啓蒙活動のターゲットは,個人と宗教的義務(信仰),女性の地位と義務,医学,宗教上の敵に絞られた。それらは時代ごとの PERSIS 指導者によって再構成されたが,同時代のイスラームの近代主義あるいは保守主義的な思想のなかでは急進的なものと認識されることが多かった。本書が対象とする時期では,1930年代はアハマド・ハッサン(Ahmad Hassan),50年代はイサ・アンシャリ(Isa Anshary)が代表的な指導者であった。

PERSIS の立場は,アハマド・ハッサンが明示したように,(1)徹底的な地域的慣習の否定,(2)ナショナリズムを含む反世俗主義にある。政治的には,前者ゆえに伝統主義的イスラームと称されたナフダトゥル・ウラマ(NU)を,後者ゆえにナショナリストたちを PERSIS は敵に回すことになる。慣習の否定は初期イスラームの教えに戻るといって近代主義的イスラームの思想からは当然としても,ナショナリズムがなぜ更正の対象になるのか。この点はナショナリズムが自前の国家を追求するという傾向との関連で明らかになる。世俗的ナショナリズムが進展し世俗国家が誕生すると,ムスリム(イスラーム教徒)が地上で分断されてしまうからである。しかし,PERSIS はイスラーム国家樹立を目指すことはせず,1940年代末から50年代にかけて西ジャワなどで活発化したダルル・イスラーム運動とは一線を画し,インドネシアの独立とともにインドネシアの統一を保ちながらその社会の純化に重きをおいた。この思想的な潮流が,1950年代における PERSIS の政治的立場を規定した。そのために,1955年の総選挙前後で PERSIS の政治的な対抗勢力が,伝統主義的イスラーム政党である NU,世俗的共産主義政党である PKI(共産党),世俗的ナショナリスト政党である PNI

(国民党)になったのは,PERSIS 的には必然であった。

PERSIS は政治団体ではなかったためにインドネシア政治史のなかでは傍流に属するものの,イスラーム教育の近代化と制度化をはかった近代主義イスラーム団体ムハマディヤと同様に,教育,とりわけインドネシア語(一部スダ語)出版を媒介にした社会の啓蒙活動には目を見張るものがある。イスラーム教育の近代化と制度化は,1920年代以降のイスラーム社会教育団体がこぞって取り組んだ課題であった。アハマド・ハッサンがリーダーシップをとっていた1930年代には,雑誌と単行本出版を活発に展開した。雑誌では『イスラームの擁護者』(1929年刊)が代表的であるが,その他にも『法学者』(1931年刊),『声』(1935年刊),『献身』(1937年刊)などがあり,それぞれ1000から2000部の発行部数を誇っていた。また,PERSIS の単行本の傾向は,(1)信仰(『神のものと統一』[1937年]),(2)イスラーム法(『証明という名の法律書』),(3)クルアーン,(4)初期イスラーム史,(5)PERSIS の組織および使命(『PERSIS 年鑑』),(6)政治(『イスラームとナショナリズム』[1940年])の6種類に分けることができる。

独立後の PERSIS の活動拠点は組織的・政治的な拠点としての西ジャワのバンドゥンと出版・知的拠点としての東ジャワのバンギルに二分化された。これは PERSIS の組織的分裂を意味するのではなく,単にアハマド・ハッサンがバンギルで活動を継続し,それに対して PERSIS 第2世代のイサ・アンシャリがバンドゥンでの活動を展開した事実を反映していた。

後者は,ムハマディヤなどの近代主義イスラーム団体が母体になっているマシュミ党との連携強化を図った。したがって,戦後の PERSIS の政治的活動はマシュミ党のなかにおける指導者の位置づけとして語られる。しかし,イサ・アンシャリはその急進主義的な思想ゆえマシュミ党には受け入れられず,彼に焦点を当てれば当てるほど PERSIS の政治的役割は傍流化する。一方で,マシュミ党のなかで活躍した PERSIS 関係者は,オランダ時代から青年イスラーム主義者連合(Jong Islamisten Bond)で政治

活動を行っていたモハammad・ナッシル (Mohammad Natsir) であった。換言すると、PERSIS は組織としての統一行動をとるというよりは、個人の緩やかなネットワークと出版および教育を媒介としたイスラーム思想発信の場という機能をこれほどまでに果たしていた。

そして、本文の記述は、スカルノ大統領によって議会政治が停止された時期、同時にそれはマシュミ党の政治的活動に対して政府からの規制がかかりはじめた時期である1957年をもって終わっている。

本書は、30年以上前になされた PERSIS に関する最初の本格的な研究であり、本書から PERSIS というイスラーム・ネットワークがつくりだしたイスラーム像とその思想を学ぶことはできる。しかし、PERSIS を扱う著者のイスラーム認識およびインドネシア認識は、本書の原型が執筆された1960年代のものが強く残されており、それが本書の議論の限界を構成する。

第1に、近代主義 / 伝統主義というイスラームの二分法である。本書は PERSIS を近代主義的なイスラームとして位置づけている。従来、インドネシアのイスラーム認識には近代主義と伝統主義という分類および対立軸が用いられていた。これはイスラーム教義の解釈をめぐる伝統主義と近代主義の分類というよりも、20世紀初頭に近代的要素を取り入れたイスラームの改革運動がインドネシアに到来し、それが現実社会における従来の伝統を保守する勢力と対立したことから生じたものである。そのために、新勢力 (Kaoem Moeda) と旧勢力 (Kaoem Toea) と呼ばれたこともある。インドネシアの文脈では、歴史的には、ジャワを中心に近代主義イスラームはムハマディヤ、伝統主義イスラームはナフダトゥル・ウラマによって代表される。伝統主義はマズハブと呼ばれるイスラーム法学派を受容し、土地の慣習に寛容である。他方、伝統主義のそうした態度がイスラームの墮落をもたらすとして、近代主義ではクルアーンやハディースというより純粋な教義・原

典への回帰を志す。

しかし、イスラーム教義解釈を離れて、この二分法には歴史認識的な問題がある。西洋近代がつくった歴史認識が反映されているからである。伝統 / 近代と対立的に類型化することで、前者から後者への時間的流れを想定し、そこからは近代主義への移行が歴史的必然であるかのような議論が導きだされる。前者は古く不純なものであり、後者は新しく純粋なものであるという印象をもたらすこともある。しかし、こうした二分法への懐疑は、フーカーの研究に代表されるように、インドネシアのイスラーム研究においても提示されるようになってきている (M. B. Hooker, *Indonesian Islam: Social Change through Contemporary Fatawa*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2003)。したがって、PERSIS を近代主義イスラームと位置づける本書のイスラーム認識は今日の通じない。

第2に、PERSIS をインドネシアにおける他のイスラーム団体との比較の観点から位置づけることに成功しているとはいえない。思想的に保守的であると PERSIS を位置づけても、たとえばムハマディヤとの相違点を明らかにしないことには保守性あるいは現実主義性は浮上してこない。

また、PERSIS の思想的基盤がアハマド・ハッサンによって1930年代に形成された事実は認めるとしても、その思想や教義が教育という制度を通してどのように次世代を形成し、継承されていったのかについての検証はなされていない。近代的カリキュラムの導入による近代教育の推進ということであれば、PERSIS 以外にもムハマディヤや「伝統主義」の NU までもそうしたことを行っていたし、インドネシア語を媒介にした出版活動はムハマディヤも1930年代から活発に展開していたために、PERSIS 独自の特徴とはいえない。

出版活動に関しては、たしかに1930年代には PERSIS はムラコ語で出版物を多数刊行していた。しかし、イスラーム思想の文字化という作業は、PERSIS に限定されたものではなく、ムハマディヤと関連をもちメダンやバダンを活動拠点としていたスマトラのイスラーム「近代主義」者にもみられる傾向であ

った。特に後者の場合は、ハムカ、タマル・ジャヤ、ユスフ・ソユブといった1930年代末に当地を中心にインドネシア大衆小説を流行させたロマン・ピチサン運動のなかでも中核的な執筆活動を行っていた作家を抱えていた。彼らはロマン・ピチサンを記すばかりではなく、『パンジ・イスラーム』などのイスラーム関連雑誌の編集や執筆にも携わりイスラーム関連記事や書籍を大量に生産し、独立後から1950年代にかけてムハマディアの中心的なイスラーム思想家として活躍した。このように比較の観点から分析することで、より PERSIS の同時代的意義は明らかになったはずであるが、その試みはされていない。

第3に、世代形成と世代継承に関する記述の欠如である。PERSIS はイスラーム教育団体にもかわらず、世代形成と継承の議論はない。第1世代はオランダ語教育を受けているのに対して、第2世代はインドネシア語教育を基礎にしている。ここから近代的教育とイスラームの連繫を察することはできるが、世代形成はみえてこない。

たとえば、独立後の PERSIS の活動拠点がバンドゥンとバンギルとに分かれた事実は、単に前者が政治的で後者が教育的であるという理由だけではないのではないか。イサ・アンシャリとモハマド・ナッシルとの政治的・思想的距離の差は、教育の相違から説明が可能であり、それがそれぞれの社会的ネットワークのもち方の違いとなって現われたのではないか。たとえば、戦後の PERSIS を代表するモハマド・ナッシルは、オランダ語教育を受けておりその意味ではアハマド・ハッサンと同世代であり、それがマシュミ党の中核で活躍する独立後の彼の政治行動を規定する要素を構成していたと考えられる。いずれにしても PERSIS が教育活動を重視したと主張しているにもかかわらず、本書には教育が形成する世代とその特徴についての考察が欠如している。

第4に、本書の中心部分の記述が1957年という PERSIS にとってはあまり意味のない年で終わっている。1957年という年はマシュミ党に関する分析であればそれなりの意味をもつが、独立後の PERSIS はマシュミ党では傍流に位置したイサ・アンシャリを軸に書かれているので、この年に PERSIS をめく

る政治社会状況が大きく変化したとはいえない。

これとの関連で、独立後の PERSIS の出版活動が1950年代半ば以降に集中している事実を本書は説明しきれていない。1950年代には、『イスラーム連合の闘争マニフェスト』（1957年刊）、『知恵』（1957年刊）、『イスラーム防衛者』（1956年刊）、『アル・ムスリミン』（1955年刊）、『イスラームの権威』（1956年刊）が PERSIS 刊行物として本書で言及されている。この事実から、むしろ1957年前後は PERSIS の出版活動が再活性化する時期にあっていた。また、PERSIS の出版活動をめぐる歴史的な事実関係としては、1940年代からの15年間ほどが空白のままとなっている。

このように本書は PERSIS 研究でありながら、PERSIS の社会宗教活動の軸をなす出版活動の盛衰を十分に説明しているとはいえないだけでなく、独立後の PERSIS 分析を出版活動の活性化が開始された時期で終えているという不可解な時期区分を行っている点をかながみると、大きな欠点があるといわざるをえない。

本書は2001年に刊行されているものの、内容的には21世紀の現代インドネシア政治やイスラームあるいはイスラーム主義を理解するには不十分であるが、それでも PERSIS の特性からは今日的な意義を見出すことができる点もある。それは、PERSIS を通してインドネシアにおけるイスラーム主義の登場を政治社会的変動との関係で整理した点にある。

しかし、本書ではイスラーム主義という言葉や概念は使用されていない。イスラーム主義とは、政治社会変動のためにイスラームからの内面的批判や内部改革の声が浮上し、イスラームを政治的イデオロギーとして選択して政治社会改革運動を実践する思想および行動である。同時に、イスラーム主義は、単独のイスラーム団体というよりは複数のイスラーム団体がそれらの指導者を媒介にしたネットワークを形成するという特徴を有する。たとえば、インドネシア史上でイスラーム主義的な傾向が見受けられ

るのは、1910年代から30年代のオランダ植民地末期、40年代末から50年代にかけての新興独立国家の建設過程、60年代からのスハルト体制形成過程、90年代以降における政府のイスラーム政策の転換を受けて、政治的イスラームの「復活」が図られた時期、というように数度の波を経験している。それぞれの時期には、イスラーム同盟、ムハマディヤ、PERSIS、NU、マシュミ、HMI（イスラーム学生同盟）、ICMI（イスラーム知識人協会）というようなイスラーム主義を掲げる団体が急速な社会変動に対するイスラームの対応として表面化した。

しばしば誤解されることではあるが、イスラーム主義は政治的な脅威と同義ではない。インドネシアは人口2億超のうちの9割近くがイスラーム教徒であり、たしかに昨今はイスラーム主義が暴力を行使する過激派あるいはテロリスト集団と結びつけて考えられるが、オランダ植民地時代を含めて歴史的にそもそもイスラームが政治的に脅威であるという認識はインドネシアにおいて必ずしも強くはない。本書の対象であるPERSISも思想的に急進的ではあるが独自の政治行動を組織化するわけではないので、政治的脅威とはなりえない。現在においても、1998年のスハルト政権崩壊後、開発統一党、月星党、正

義党などのイスラーム主義を掲げる政治政党が複数台頭し、イスラーム中道勢力を構成しており、また、ムハマディヤ、NU、HMIなどのイスラーム学生運動団体が政治社会において大きな影響力をもっているとはいえ、インドネシアではイスラームが国教であるわけではなく、イスラーム政党が国政を牛耳っているわけでもない。むしろインドネシアにおいて特徴的なのは、もはやインドネシア人というアイデンティティが確立されているという揺るがない事実であり、イスラーム主義は政治的な脅威を構成していないことである。

以上を要するに、PERSISを研究対象とした本書から現代的意義をあえて読み取るとすると、PERSISにとどまらないイスラーム主義の思想や運動の特徴が浮かびあがってくる。それは、(1)インドネシア社会での変動とそれへのイスラーム主義としての対応、(2)対応の段階で構成される（時には組み替えられる）イスラーム主義を担う個人や集団間の緩やかなネットワーク、(3)情報発信の手段としての各種メディアの積極的利用、という点にまとめられるであろう。

（慶應義塾大学法学部教授）